

夢のある酪農を 実現するための課題

酪農学園大学 教授

今岡 久人

はじめに

ガット交渉では、乳製品輸入の関税化がささやかれています。その対策として、経営規模の拡大や牛乳のコスト低減がいわれます。しかし、飲用牛乳や乳製品の消費停滞から生乳の生産調整が行われ、酪農家の生産意欲を減退させています。多頭化や近郊化はふん尿による環境汚染と臭気公害を招き、酪農経営の障害になっています。これらの酪農を取り巻く環境が先行き不安を助長し、酪農家戸数の減少と後継者のいない酪農家を増加させていると思います。

ただ、このような状況だから、酪農は衰退しているとは言えません。わが国の牛乳生産量は年々増加しています。酪農家戸数は減少しましたが、1戸当たり乳牛頭数や1頭当たり乳量は増加を続け、産業としての酪農は発展しているのです。

小売業では、零細規模の小売業者は高齢化が進み、業者の数は減少しています。そのことだけで、小売業界が不振とは言わないでしょう。消費の拡大は都市の経済を発達させ、都市に人口が集中する原因になりました。

酪農家戸数が減った直接的原因に、負債の増加や投資の限界が挙げられます。それは別の視点からは、経営競争や産地間競争の敗北です。これからの酪農は、小売業が大型スーパーに席捲されたように、経営の再編が進むでしょう。その中で、夢のある酪農をどう実現するかです。

1 酪農経営の現状と問題点

わが国の酪農は戸数の減少と同時に多頭化が進みました。1戸平均乳牛飼養頭数は30頭を超え、100頭以上の経営も珍しくありません。

1頭当たり乳量も向上しました。平成4年の北海道の乳牛検定成績では、乳期検定(305日)で8kgを超えています。

多頭化や産乳量向上の一方で、濃厚飼料が多給され、飼料自給率が低下しました。北海道でもアルファルファ乾草など粗飼料を購入する経営ができ、本州と変わらない乳飼比(乳代に対する購入飼料費の比率)を示しています。

乳牛の飼養環境(飼養技術や粗飼料の品質など)が伴わない高泌乳は乳牛の耐用年数を短くしました。北海道の乳検成績では、経産牛の平均生涯産数は2.5産と推測されます。個体の価格が高いときは、乳牛の耐用年数はそれほど重要ではありません。しかし、最近のように個体価格が下落すると、耐用年数の短縮は減価償却費を高くし、牛乳生産コストの引き上げにつながります。

また、産子数が少ないことは後継牛の確保を困難にし、個体販売収入を減少させます。その上、2・3産牛の構成比率が高く、産乳能力が低下します。そのため、乳量確保しようと、濃厚飼料を多給する悪循環を招くのです。

酪農経営は稲作や園芸など諸形態の中で、経営規模の拡大の進度が最も著しいといえます。また、土地や施設だけでなく家畜への投資も必要で、資

本投下が最も大きい形態です。急激な投資拡大に、自己資本の蓄積が追いつきません。中には、負債が1億円を超える経営までみられ、他の形態に比べて負債の多いのも特徴です。

後継者不足は、どの形態にも共通します。酪農は、その中では比較的、後継者が残っています。労働需要が多く、時期による変動が少ないのが、その理由のようです。しかし、稲作や園芸経営では、Uターンが期待できますが、酪農経営では、家を出た後継者が再び戻ることは期待できません。後継者の現状から、今後の酪農家戸数は確実に減少するといえます。

多頭化した酪農経営にとって、経営内部の最大の問題はふん尿処理です。かつての酪農では、ふん尿を飼料畑に施用し、そこから生産した自給飼料を乳牛に給与する仕組みでした。それは、有機循環農法といわれ、理想的な農法とされたのです。今は、排泄されるふん尿の全量を飼料畑に施用するのは困難で、その処理に困っているのが実態です。畑の1枚をふん尿の捨て場に行っている経営もみられます。

経済の問題では、乳価の低迷や生乳の生産調整もさることながら、個体価格の低下が酪農経営の所得の減少の原因となっています。かつて18万円もしたヌレ子が本州では1万円にもならない地域もみられます。北海道では、未経産牛や廃用牛の価格が下がり、離農するのに乳牛を処分したら、1頭平均7万円だったという話も聞かれます。輸入牛肉との価格競争や生乳生産調整の現状から、今後も個体価格の急激な値上がりは望めません。

このように、問題点の多い酪農ですが、その中で牛乳コストを低減し、利益を上げている経営が多数あります。そのために、経営間の格差をいっそう拡大しています。これからは、目標を見定めた経営改善が重要と言えるでしょう。

2 豊かさやゆとりのために

なぜ酪農をするのかには、2つの目的があると思います。1つは、わが家の経済を支える、生活の手段としての酪農です。経営規模を拡大したり、1頭当たり乳量を向上するのは、わが家の経済を豊かにするためでしょう。

酪農経営の所得を上げるには、生産技術の向上とともに経営管理の合理化が重要です。牛乳の生産コストは生産技術と経営技術の成果といえます。

ここでいう生産技術の改善とは、1頭当たり乳量の増加だけでなく、その時の飼料効率や受胎成績も含めて評価するものです。ある酪農経営では、初産の乳量が1kg以上の牛や8kg以下の牛は残しません。個体の能力差の少ない方が、牛群としての管理が容易だという理由からです。

別の経営では、高泌乳を求めず、年間の1頭当たり乳量を6,500kgから7,000kgになるように調整しています。その方が、わが家の粗飼料の品質では、飼料効率が高く受胎成績が良いという理由です。その代わりに、飼料畑にはできるだけ化学肥料を使わず、腐熟堆肥を施用して、粗飼料の生産コストを低くしています。

放牧方法を見直し、集約的な放牧で乳牛管理やふん尿処理の省力化と牛舎の衛生管理を改善した経営が酪農雑誌に紹介されていました。北海道でも周年舎飼いの経営が増えている中で、経営条件を生かした放牧の導入は1つの見解といえます。

近年、コンプリートフィードや泌乳ステージによる飼料給与のように、新しい飼養技術が開発されています。わが家の生産条件も考えず、それを行うのみに取り入れるのが経営にプラスとは限りません。技術が高度化するほど、乳牛生理や土壌に関する基礎知識を熟知し、技術をアレンジできる能力が要求されているのです。

経営管理には、わが家の実態を把握し、経営成果を評価して計画を立てられる簿記・診断・設計の能力が必要です。それは、定められた帳簿や様式に記入できるというのではなく、それぞれの機能や仕組みを理解しているという意味です。

情報化時代といわれるように、いまは情報をどうして収集し、どのように利用するかが重要になりました。わが家の経営状況は内部情報です。酪農を取り巻く情勢や資材や生産物の価格動向などが外部情報です。これらの情報から、わが家の経営の方向やあり方を判断して実行するのです。

酪農をするもう1つの目的は、生きがいにあります。よい酪農経営を実現するのも、立派な生きがいです。しかし、価値観の多様化している今日

では、家庭や農村の生活に生きがいを求める人たちもいます。酪農に新規参入する人たちの多くは、農村に暮らしによさを感じているのです。

経済的な豊かさは、経営改善によって得られません。しかし、働きづめで労働を犠牲にして所得を確保しても、本当の意味で豊かとは言えないでしょう。それでは、後継者や花嫁もいなくなります。労働生産性を高める経営改善とともに、余暇を生み出す経営の仕組みが求められているのです。今は、定休型の酪農ヘルパーの利用など、若い経営者に余暇を大切にする意識が高くなりました。

土地利用の経済に証明されるように、資本主義体制では農業が他産業より儲かることはないでしょう。農地が宅地より高くなり、ゴルフ場が畑には戻らないからです。しかし、所得が低くても、それで都会より高い価値が得られるならば、豊かな農村といえます。それは、時間や気持ちの「ゆとり」から、生活や文化がもたらすものです。

しかし実際には、いつの間にか都市の生活様式や意識が農村に浸透しました。経済優先の思想とともに、生活の都市化が進んでいるのです。都会の団地と同じ農村の住宅型式が、それを物語っています。緑にマッチしない風景は名画に墨を落としたようです。これからは、ゆとりある生活のために、新しい農村文化を育むことが大切です。

3 多様化する経営形態

酪農経営では多頭化とともに、経営間の格差が広がっています。100頭以上の経営が生まれた一方で、依然として、10頭未満の酪農家もみられるのです。先進国で大規模経営と小規模経営が共存しているように、わが国の酪農も経営間の規模の格差は今後も大きくなるでしょう。これは、それぞれに存在する意義があるからなのです。

スケールメリット（大規模生産の有利性）がある限り、経営規模の拡大は当然の方向です。資本主義体制では、酪農だけでなく、すべての業種で経営規模を拡大しています。

わが国の牛乳生産コストが高くなる理由の1つに、施設や機械の稼働率の低さが挙げられます。

近年、大型トラクターやスチールサイロ、ミルクキングパーラーなど、大規模経営用の施設・機械

が導入されています。家族経営では稼働率が低くなり、生産コストが高くなるのは当然です。

アメリカの大牧場では、3回搾乳でミルクキングパーラーは1日中稼働しているといえます。働く人は8時間労働で3交替制です。スケールメリットを追求するならば、いかに施設や機械を有効に利用し、労働生産性を高めるかが大切です。現状では、70~80頭を搾乳する家族経営が最も労働過重でしょう。その上、施設・機械の投資も大きく、所得はそれほど高くありません。

大規模な企業経営のもう1つのメリットは労働条件です。家族経営では、乳牛管理で休日もあります。それが大規模経営では、働く人数が多いので交替して休むこともできます。

大規模な企業経営では、生産性の高い酪農を実現できる代償に、拘束が生まれ自由が奪われます。かつて各地にみられた共同経営が解体した理由の1つは、農業のよさである自由がないことでした。そこに価値を見出すときは、施設や機械の投資を控え、多労的でも小規模の家族経営を選ぶでしょう。休むときはヘルパーを利用します。

ある酪農家では、家族生活を大切にしようと、子供が学校に出かけてから朝の搾乳をしています。これも自由がきくからできるのです。牛を育てることが生きがいならば、牛と一緒にいるのは労働ではなく喜びになります。

ヨーロッパの家族経営では、民宿をする場合が多いといえます。わが国でも、グリーンツーリズム（都市と農村の交流）を進めています。体験農場とかファームイン、観光牧場、子牛のオーナー制度などで、農村を活性化しようというのです。実際に、各地でその試みがみられます。

ただし、わが国では、それが小規模農家の主流とはならないでしょう。余暇を過ごす文化がヨーロッパとは違うからです。豊かさの1つである情報の発信地としての農村づくりが都市と農村の交流の狙いだと思います。

最近、消費者の顔のみえる農産物生産といわれます。酪農では、チーズやアイスクリームなどの自家生産と販売をしている経営が増えました。飲用牛乳を宅配している酪農家もおります。それに、ハム、ベーコンの肉製品の加工・販売やレストラ

ンまで現れました。

生産だけでなく、加工・販売までを一貫する多角経営は、これからの酪農のあり方の1つです。この場合も、大企業による加工・販売に比べて生産性や収益性が低いのは当然です。この狙いは生産物に付加価値をつけることだけでなく、都市と農村の交流にあります。

4 酪農の発展に必要な環境条件の整備

このような酪農を実現するには、わが国の環境条件は整っていないといえます。例えば、牛乳の生産コストは個別経営だけで低減できません。肥料や飼料など農業生産資材の価格も生産コストに関係します。過剰に加工した資材や過剰に装備した機械はコストを高くする要因です。

生産資材の供給や生産物の加工・販売、流通に携わる関連産業の発達は生産の外部への依存度を高めました。また、技術革新という名分で、既存の投資を回収しないまま、新しい投資が行われています。それらは経営内部での付加価値部分を少なくするだけでなく、経営努力の効果を弱めるのです。牛乳の生産コストを押し上げるかなりの部分は関連産業にあるといえます。個別経営の改善とともに、関連産業の整備が望まれます。

現状の生乳の生産調整も酪農発展の阻害要因となっています。今は、採算の成り立つ経営も成り立たない経営も一律配分です。規模拡大を目指すか、現状維持かも考慮されません。ヨーロッパには、生乳を生産する権利を売買できるクォーター制度があります。わが国は自主調整の名目で生乳

生産の権利が曖昧になり、経営改善を阻害しているのです。生産調整が恒常化した現状では、クォーター制度の導入が必要と思います。

牛乳の加工、流通の仕組みにも問題があります。個人やグループで飲用牛乳や乳製品の製造・販売をしようにも制約が多過ぎます。製造の認可を取るのが困難で、わが家の生乳も自由に使用できません。全く生乳が動いていないのに、指定取扱団体に出荷してからそれを買取取る仕組みです。その間に取扱手数料もかかります。

良質の牛乳を生産し、それを特約して販売することもできません。補給金がいらなければ、酪農家が自由に販売できる仕組みや製造・加工の許可の取得が容易な制度が望まれます。

現在、酪農の最大の課題はふん尿処理です。有機物の合理的な循環からみて、わが家だけで処理することは不可能でしょう。堆積したふん尿が河川に流れ出し、トラブルを起こしている事例もみられます。処理施設の整備に資金がかかり、それが酪農廃業の原因となった話も聞きます。

野菜や畑作経営と混在している地域では、堆肥化して地域で利用するシステムづくりが必要です。その中で、堆肥生産のコストを負担するのです。堆肥生産・利用組織のように、今では各地にその事例がみられます。

専門酪農地域では、土地面積からみた飼養頭数の確保のように、新しい経営の確立が必要です。これは、新しい循環農法の創出です。あるいは、ふん尿を利用したコンポスト生産など、新技術の開発が望まれます。

あなたの牛舎においます!?

今、「地球環境にやさしい」畜産経営も求められています。

スノーエックス

(土壌微生物発酵飼料・混合飼料)



- スノーエックスは、家畜の腸内微生物を良好にコーディネートします。
- スノーエックスでコントロールされた糞は悪臭がほとんどなくなるため、家畜を悪臭ストレスから守り、畜舎環境を改善します。
- スノーエックスを給与した糞は極めて分解が早く、繰り返し作業を節約して、短時間で良好な完熟堆肥になります。